

訳者あとがき

本書は、世界的ベストセラー『ワイルド・スワン』のあとに続く歳月を物語った作品である。

『ワイルド・スワン』は一九九一年に英語で出版され、日本語版は一九九三年一月に刊行された。作品は世界的ベストセラーになり、世界じゅうで一千数百万部が売れ、日本だけでも累計で三〇〇万部以上が売れた。本書を手にとった読者のなかには、三五年前の『ワイルド・スワン』を読んだときの衝撃や感動をいまだに記憶しておられる方も多いだろうと思う。とはいえ、もう三〇年以上も前の作品なので、ここでいちど『ワイルド・スワン』の筋書きを、ごくおおざっぱに振り返っておこう。

著者ユン・チアンの祖母楊玉芳ヤン・ユイフアンは一九〇九年に生まれ、一五歳で当時北京の警視總監であった將軍に妾として捧げられた。やがて娘（著者の母親）が生まれたが、玉芳は將軍の愛妾として経済的には恵まれながらも男のなぐさみものでしかない人生に絶望し、娘を連れて將軍の手の届かないところへ逃げた。その後、玉芳は滿人の漢方医夏先生ハシヤと再婚し、貧しいながらも心が満たされる幸

せな暮らしを手に入れた。

楊玉芳の娘は夏徳鴻^{シャートン}という名を与えられ、自立心の旺盛な少女に育った。一九三〇年代から四〇年代にかけて、中国社会は日本の侵攻や国共内戦で混乱し、国民党の政治に強い反発を抱いた徳鴻は共産党の地下組織と連繋して活動を始めた。そして、共産党の古参党員であつた張守愚^{チアンシオウユイ}と出会い、二人は恋に落ちて結婚した。

著者の父親張守愚は、役人の身内びいきなどの政治腐敗を撲滅するという共産党の目標を愚直なまでに実践する役人で、身内に対する特別扱いを徹底的に拒絶し、一族の者たちから反感を買ったが、それでも家族は清廉潔白な父親の生き方を尊敬し、父親を愛しつづけた。

一九六六年、毛沢東^{マオツォードン}の号令で文化大革命が始まると、役人たちは粛清の標的とされ、著者の両親である張守愚と夏徳鴻も残酷な批闘大会でひどく痛めつけられ、子供たちは虐待される父と母を支える日々を送ることになる。張守愚は毛沢東に宛てて文化大革命を批判する手紙を書いたため投獄され、徹底的に痛めつけられた。

やがて、父と母は別々の強制労働収容所に送られて苛酷な労働を強いられ、子供たちは遠くの農村に下放^{かほう}されて「農民から学ぶ」生活を強いられることになった。文化大革命の嵐が吹き荒れるあいだ、著者をはじめとする子供たちは僻地の労働収容所に送られた父と母をたびたび訪ねて面会し、励ましつづけた。

一九七六年、毛沢東が死んで文化大革命が終わったあと、ようやく著者の父親の名誉回復がおこ

なわれ、中国全土で実施された海外留学生の選抜試験に合格した著者ユン・チアンは一九七八年にイギリスへと飛び立った。

こうして中国という鳥籠から放たれたユン・チアンのその後を語ったのが、本書である。好奇心旺盛な著者がイギリスに留学し、中国大使館から課された厳しい制約を少しずつ打ち破りながらさまざまな自由を獲得していくようすが描かれている。

イギリスに住むようになったあと、著者ユン・チアンは母親をロンドンに招き、観光案内をして母親を楽しませようとしたが、母親はどこか心こもらずのようすで、イギリス滞在を心から楽しんでるようには見えなかった。ある日、散歩中に公園で円盤のような形をした大きな石を見かけた母親が「ちようどこんな石を使っておばあちゃんは纏足^{てんそく}をされたのよ」と著者の祖母が幼い頃に纏足をされて言語に絶する痛みに苦しんだエピソードを語ったのがきっかけとなり、ユンは母親の話に興味を持つようになった。自分の生きてきた半生のこと、自分の母親（ユンの祖母）が生きた一生のことを娘のユンに聞いてほしい、というのが母親夏徳鴻が心に抱いていた（しかし無理には主張しなかった）思いだった。それから続く数カ月のロンドン滞在中に、夏徳鴻は自分の母親と自分自身の人生について長時間に及ぶ録音テープの記録を残して、中国へ帰っていった。ユンは六〇時間に及ぶ母親の語りを聞いて、『ワイルド・スワン』の執筆を決意した。この本を書くことに

よって、ユンは母親のことをより深く理解し、母親も自分の人生を娘にわかってもらえたという満足を得ることができた。

二〇二五年、ユンの母親夏徳鴻は老境にあり、からだが弱っていつ亡くなっても不思議ではない状態になった。ユンはイギリス国籍を取得してイギリスで暮らすことにして以降も毎年のように四川省成都に住む母親に会いに中国に通っていたが、二〇一八年を最後に、母親との面会が叶わなくなった。中国を毛沢東主義の国家に引き戻そうとする習近平が打ち出した方針のもとで、毛沢東を批判した者は中国に入国すれば逮捕される危険が生じたからだ。著者ユン・チアンは『ワイルド・スワン』で文革当時の苛酷な現実を描いたうえに、その後、夫ジョン・ハリデイとの共著で『真説 毛沢東 誰も知らなかった実像』を執筆し、毛沢東を痛烈に批判したため、習近平体制の中国に帰国すればそのまま拘束されてイギリスに戻れなくなるおそれがあり、愛する母親の臨終を見舞うことができなくなった。

ユンの母親夏徳鴻は、つねに子供たちの自主性を尊重して、子供たちのすることに口をはさんだり反対したりしない、ただし子供たちの安全を守るためには万難を排して必要な手を打つ、という頼もしい存在だった。五人の子供たちはそんな母親を誇りに思い、ユン・チアンは、今日ある自分を形作ってくれた母親への感謝を込めた最後のラブレターとして、この本を書こうと思い立った。

本書には、イギリス留学直後の生活から始まって、中国人留学生を厳しく監督しようとする中国大使館の監視の目をすり抜けながらイギリス社会を理解しイギリス社会に溶け込もうと冒険を重ねるユンの日々が描かれている。『ワイルド・スワン』を書き上げる前の恋人たちとの関係、生涯の伴侶ジョン・ハリデイとの出会い、『ワイルド・スワン』がベストセラーとなったあとの喜びと悲しみ、乳癌にゅうがんの手術と闘病、『真説 毛沢東 誰も知らなかった実像』を書くための一〇年にわたる取材の日々などを描きながら、ユンは母親の夏徳鴻に対する感謝と愛情を綴ると同時に、中国社会の変貌や公安による干渉なども克明に描写していて、中国を新毛沢東主義に基づく共産国家として発展させ世界の支配を目論む習近平政権の野望など、現代中国の一端を垣間見せてくれる作品にもなっている。

最後になったが、本書を翻訳する機会をくださり、刊行までの長い道のりを一緒に歩いてくださった光文社翻訳担当編集長の小都一郎氏に心から感謝を申し上げる。また、原稿を綿密にチェックしてくださった校閲の皆さんにも感謝を申し上げます。

二〇二六年 五月

土屋京子